

# 野 芥 4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第804集

2004

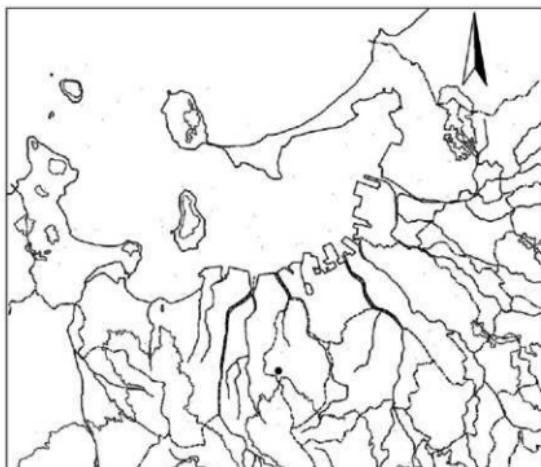
福岡市教育委員会

# 野 芥

4

## 野芥遺跡群第11次発掘調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第804集



遺跡名 野芥遺跡群  
遺跡番号 NKE-11  
調査番号 0206

2004

福岡市教育委員会

# 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところです。

本報告による野芥遺跡群第11次調査では、旧石器時代から中世後半代の遺構・遺物を多く確認することができ、当時の歴史的環境を知る上で貴重な成果を挙げることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 生田 征生

## 例 言

1. 本書は平成14年度（2002年度）に福岡市教育委員会が実施した野芥遺跡群第11次調査の発掘調査報告書である。調査地点の所在地は巻末抄録によられたい。
2. 遺構の実測は、阿部泰之が行った。
3. 遺物の実測は、土器・石器を阿部が、石器の一部を平川敬治が行った。
4. 製図は、阿部・井上加代子が行った。
5. 写真撮影は、阿部が行った。
6. 遺構番号は、全遺構の通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付して呼称している。遺構は、掘立柱建物（S B）・竪穴住居（S C）・溝（S D）・土壙（S K）・池状遺構（S X）で表している。
7. 遺物番号は、通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
8. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から6° 21' 西偏する。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
10. 本書の執筆・編集は阿部が行った。

## 本文目次

第1章 はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
第2章 調査の記録	
1. 既往の調査	5
2. 調査概要	5
3. 旧石器時代の遺物	5
4. 繩文時代の調査	
①石器	8
②その他の製品・石器未製品・使用剥片	8
③繩文土器	8
5. 古墳時代以降の調査	
調査概要	10
①掘立柱建物（SB）	10
②竪穴住居（SC）	10
③溝（SD）	18
④土壙（SK）	21
⑤SX（池状遺構）	23
⑥遺構内出土の石器	24
⑦小結	24

## 挿図目次

Fig. 1 調査区位置図 (1/25,000)	2
Fig. 2 調査区位置図 (1/8,000)	3
Fig. 3 調査区位置図 (1/1,000)	4
Fig. 4 グリッド配置図 (1/200)	5
Fig. 5 第4次第11次調査出土旧石器実測図 (2/3)	7
Fig. 6 包含層出土繩文土器実測図 (1/3)	8
Fig. 7 第1区包含層遺物出土状況実測図 (1/100)	9
Fig. 8 第2区包含層遺物出土状況実測図 (1/100)	10
Fig. 9 包含層出土石器実測図① (2/3)	11
Fig. 10 包含層出土石器実測図② (2/3)	12
Fig. 11 第1区遺構配置図 (1/100)	13
Fig. 12 第2区遺構配置図 (1/100)	14
Fig. 13 第1区南北土層断面実測図 (1/80)	15
Fig. 14 SB376・378建物跡実測図 (1/60)	15
Fig. 15 SC30・172住居跡実測図 (1/30)	16
Fig. 16 竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)	16
Fig. 17 SC278・284住居跡実測図 (1/60)	17
Fig. 18 SC279・280・285・289住居跡実測図 (1/60)	18
Fig. 19 SD溝出土遺物実測図 (1/3)	19

Fig.20	SK土壤実測図 (1/20・1/40) .....	20
Fig.21	SK土壤出土遺物実測図 (1/3) .....	20
Fig.22	SX101池状遺構出土遺物実測図 (1/3) .....	21
Fig.23	遺構内出土石器実測図① (2/3) .....	22
Fig.24	遺構内出土石器実測図② (2/3) .....	23
Fig.25	ピット内出土遺物実測図 (1/3) .....	24
Fig.26	遺構検出面出土石核実測図 (2/3) .....	24

## 図版目次

- Pl. 1    ①第1区 全景（南より）  
          ②第2区 全景（東より）
- Pl. 2    ①第1区 A-2グリッド遺物出土状況（東より）  
          ②第1区 D-4グリッド遺物出土状況（東より）  
          ③第1区 C-4グリッド石匙出土状況（南より）
- Pl. 3    ①第1区 SB379建物（東より）  
          ②第2区 SB378建物（南より）  
          ③第1区 SC30住居（南より）
- Pl. 4    ①第2区 SC172住居（西より）  
          ②第2区 SC278住居（南より）  
          ③第2区 SC284住居（北より）
- Pl. 5    ①第2区 SD142溝（北より）  
          ②第2区 SK288土壤（東より）  
          ③第1区 SP45遺物出土状況（東より）
- Pl. 6    ①SX101北側溝石横検出状況（北より）  
          ②SX101池状遺構配石検出状況（西より）  
          ③出土遺物

## 第1章 はじめに

### 1. 調査に至る経過

平成13年9月6日、医療法人浜江堂から、病院の増築に伴う早良区野芥5丁目268番地他9筆（面積：14,783m<sup>2</sup>）における埋蔵文化財事前審査申請書が<sup>1</sup>、教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下、埋文課）に提出された（事前審査番号：13-2-458）。申請地は、周知の文化財包蔵地である野芥遺跡群（分布地図番号：84、遺跡略号：NKE）の範囲内であった。そのため、これを受ける形で、同課は、申請地内にて遺構の遺存状態確認のため、平成13年10月13日に試掘調査を実施した。その結果、溝・柱穴が検出された。この結果を基に両者で協議を行った結果、建築工事に伴う基礎工事によって遺構が広範囲にわたり損傷するため、記録保存のための発掘調査が必要であると決定した。

その後、委託契約を締結し、平成14年4月8日より、野芥遺跡群第11次調査として本調査を実施、翌平成15（2003）年度に資料整理・報告書作成を行うこととなった。

### 2. 調査体制

調査体制は、下記の通りである。本調査・整理作業・報告書作成は、医療法人浜江堂をはじめ、関係者および周辺住民各位の理解・協力の下、順調に推移した。記して感謝の意を表すものである。

調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
教育長	生田征生
文化財部長	堺徹
埋蔵文化財課長	山崎純男 同調査第1係長 力武卓治
試掘調査担当	田上勇一郎・大塚紀宣
調査担当	阿部泰之
庶務担当	後藤康子 川村浩旭（前任）
調査作業員	梅野眞澄 木田ひろこ 栗木和子 柴藤清志 辻節子 辻哲也 徳永洋二郎 西川吾郎 松本順子 三谷朋子 安河内史郎
整理作業員	窪田慧 黒早苗



1	野芥遺跡群	15	小袖遺跡	29	駒ヶ原古墳群D群
2	次郎丸高石遺跡	16	中尾池北遺跡	30	駒ヶ原古墳群C群
3	免道跡群	17	駒ヶ原古墳群A群	31	駒ヶ原古墳群G群
4	野芥大坂遺跡	18	大谷古墳群	32	駒ヶ原古墳群F群
5	田隈遺跡	19	倉瀬戸古墳群	33	野中B遺跡
6	クエゾノ遺跡	20	早苗田古墳群A群	34	駒ヶ原古墳群A群
7	船金H遺跡	21	山崎古墳群A群	34	駒ヶ原古墳群C群
8	飯倉G遺跡	22	山崎古墳群B群	34	駒ヶ原古墳群B群
9	飯倉E遺跡	23	山崎圓錐遺跡	37	西油山古墳群H群
10	飯倉F遺跡	24	山崎古墳群C群	38	西油山古墳群E群
11	七隈古墳群A群	25	影塚古墳群	39	西油山古墳群G群
12	五ヶ村池遺跡	26	クエゾノ古墳群	40	西油山古墳群D群
13	五ヶ村池製鉄遺跡	27	駒ヶ原古墳群B群	41	西油山古墳群C群
14	七隈古墳群B群	28	駒ヶ原古墳群E群		

Fig. 1 調査区位置図 (1/25,000)

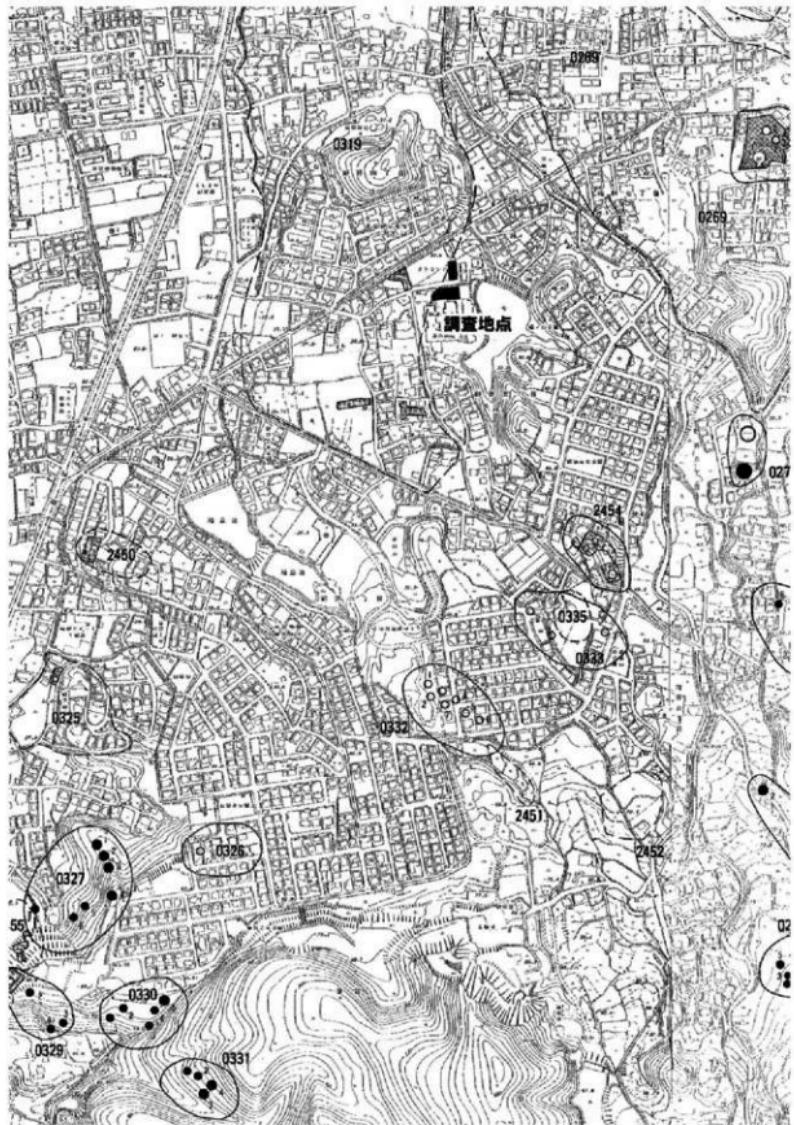


Fig. 2 調査区位置図 (1/8,000)

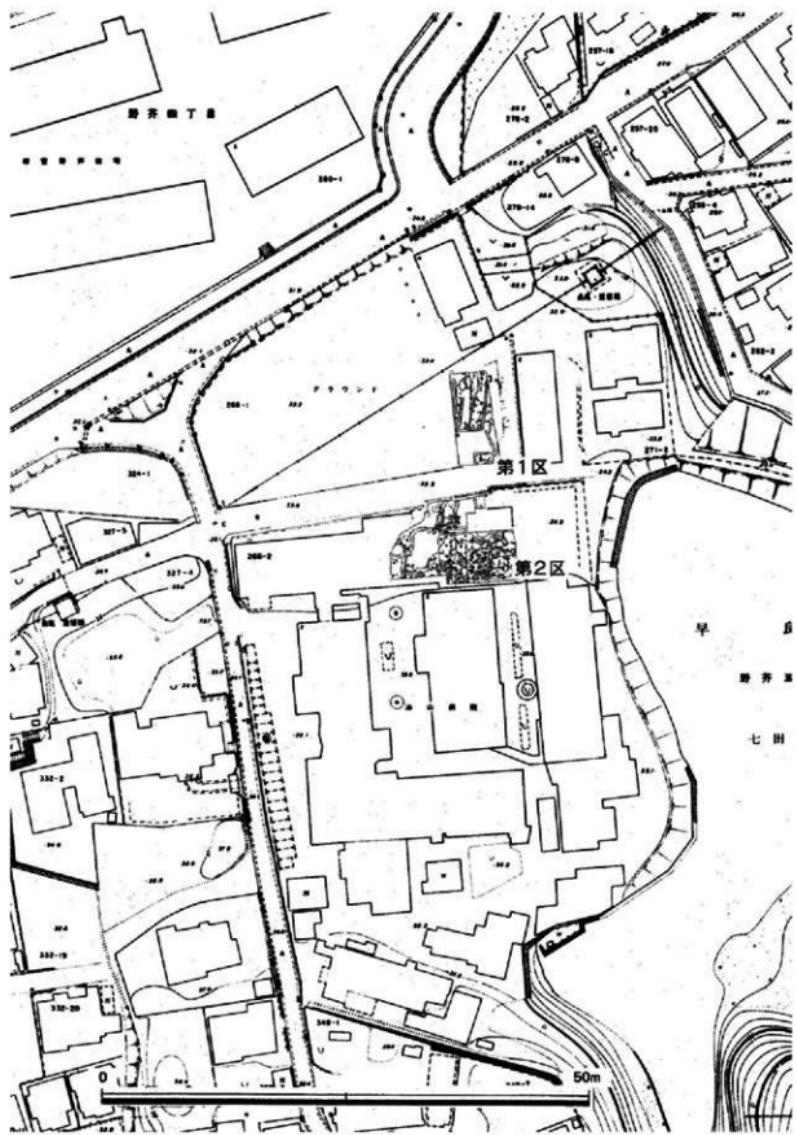


Fig. 3 調査区位置図 (1/1,000)

## 第2章 調査の記録

### 1. 既往の調査

現在、野芥遺跡では、計11回にわたる調査が行われている。以下、報告書刊行済みの調査に限り、概要をまとめる。

第1次調査では、住居址（7世紀前半）・土壤・溝が検出された。第2次調査では、柵列・掘立柱建物2棟・住居址4軒・溝が検出された。出土遺物から、建物・住居址が古墳時代後期、溝が古代と思われる。いずれも調査範囲は200～300m<sup>2</sup>程度である。

第4次調査では、弥生時代から中世にかけての住居址・土壤・掘立柱建物・溝・庭園状遺構などが検出された。第5次調査では、古墳時代前期から中世にかけての住居址・掘立柱建物・溝・土壤が検出された。第7次調査では、旧石器時代の土壤・古代から中世後半期の土壤・溝が検出された。第8次調査は、前述の調査地が位置する台地北側の沖積地に位置する。古墳時代中頃の溝・土壤・中世の溝が検出された。第10次調査では、中世の溝・ピット群が検出されている。

### 2. 調査概要

検出遺構は、掘立柱建物3棟・竪穴住居7軒・溝5条・池状遺構1基・ピット群である。第2区掘立柱建物は、2間×2間の總柱建物で、中世の溝に切られる。住居址は、出土遺物から古墳後期末から古代にかけてのものであろう。溝からは、龍泉窯系青磁碗・瓦質土器・瓦類が出土している。建物は、前述の3棟以外見つけられなかった。

### 3. 旧石器時代の遺物

遺構検出時に三稜尖頭器1点、縄文時代包含層から三稜尖頭器1点、細石器1点が出土した。

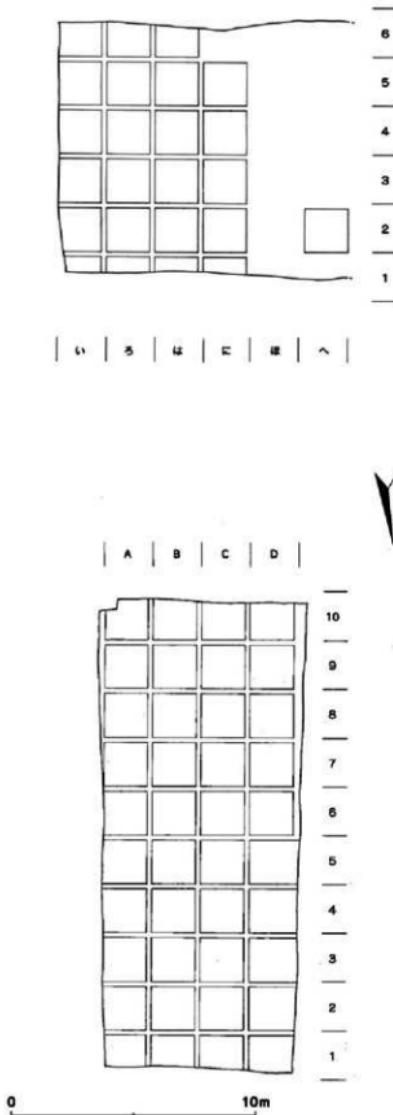


Fig.4 グリッド配置図 (1/200)

## 野芥遺跡第11次調査の旧石器時代資料

### 1. 概要

本調査では少數であるが後期旧石器時代の石器が出土した。何れの資料も縄文時代以降の遺物と混在状態で出土しており、本來の包含層を避離している。野芥遺跡ではこれまで4次、7次調査地点で後期旧石器時代の石器類が出土している。この中で7次調査ではこの時期では希な遺構に伴って出土し、貴重な資料として注目された。今次を含めた三地点は油山山塊から北西へ伸びる丘陵部上の僅約100mの範囲内に点在している。今次調査の資料数は少なく、一括性にも問題を残すものの、後期旧石器時代の遺構構造を検討する上で重視されるものである。同時に出土した剥片・碎片類のなかには同時期の可能性があるものも散見されたが、ここでは確実な資料に限って報告したい。

なお、野芥遺跡第4次調査出土石器は同報告書中に記されたように未掲載であった。今次調査資料の検討にも必要であり、ここに参考資料として掲載するものである。

### 2. 11次調査出土石器

1は角錐状石器である。各所に新しい傷（ガジリ）があり、先端部を大きく欠損する。石材は不透明灰色の黒曜石であり、針尾島産黒曜石に類似する。全体に風化が進んでいる。横長の不定形剥片を素材とし一（右）面に粗い調整削面を施す。また基部右側に背済し状の削離を施し茎部を形成する。現状で長さ5.1cm、幅2.1cm、厚さ1.4cmである。

2はナイフ形石器の基部破片とみられる。石材は安山岩か玄武岩であり、風化が進み表面は荒れて剥離面は不明瞭である。根元の不定形剥片を素材とし基部右側に背済し状の削離がある。現状で長さ3.6cm、幅2.6cm、厚さ0.6cmである。

3は角錐状石器である。先端部を欠損する。石材はサスカイトであり、風化が進んでいる。素材は横長剥片である。二次調整は両側縁が斜交削離であり、両面基部側は平坦削離が施される。現状で長さ3.5cm、幅1.6cm、厚さ1.2cmである。

4は使用痕ある剥片である。先端部を欠損する。石材はサスカイトであり、風化が進んでいる。平坦打面の薄い剥片で、右側縁に微細削離が認められる。現状で長さ4.7cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmである。

5は使用痕ある剥片である。先端部を欠損する。石材は耐候性的黒色黒曜石であり、半田産黒曜石に類似する。風化はやや進んでいる。縱長剥片であるが、末広がりあり、背面の先行削離は対向方向である。打面両設石核とみられる。右側縁に微細削離が認められる。現状で長さ2.0cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmである。

6は細石刃の可能性がある小剥片である。先端部を欠損する。石材は耐候性的黒色黒曜石であり、半田産黒曜石に類似する。打点部には数回の剥離状跡が発生し打点部は潰されている。現状で長さ1.4cm、幅0.8cm、厚さ0.2cmである。

### 3. 参考資料：野芥遺跡第4次調査の旧石器時代資料

7はI区出土のナイフ形石器である。先端部を確かに欠損するがほぼ完形である。石材は黒色透明の良質黒曜石であり、自然面の状況は巣岳産黒曜石に類似する。全体に風化が進んでいる。厚みのある縱長剥片の基部両縁と先端左側縁に調整を施す。現状で長さ4.7cm、幅1.7cm、厚さ0.8cmである。

8はA区出土の形態である。石材は漆黒色不透明の良質黒曜石であり、半田産か。全体に風化が進んでおり、ガジリが多い。側縁にボジ面を残す厚みのある縱長剥片を素材とし、剥片の先端側に打面調整し、側縁に沿って縦状剥離を施し刃面を削削する。刃面と裏面の二面に微細削離が認められる。現状で長さ3.2cm、幅1.8cm、厚さ1.5cmである。

9はB区出土のくさび形石器である。石材は漆黒色不透明の良質黒曜石であり、全体に風化が進んでいる。素材は両端に自然面が残る横長剥片であり、小剥片を分割している。両端と一端側から剥離が施される。右側縁には微細削離があり、刃器と共に削した形状を示す。現状で長さ2.3cm、幅1.2cm、厚さ0.9cmである。

10はC区出土の微細削離のある剥片である。石材は漆黒色不透明の良質黒曜石であり、自然面の状況は巣岳産黒曜石に類似する。全体に風化が進んでおり、ガジリが多い。素材は平坦打面で厚みのある縦長剥片であり、エッジをなす右側縁に微細削離が認められる。削器としての機能が想定される。現状で長さ5.0cm、幅2.5cm、厚さ1.6cmである。

11はB区出土の剥片である。石材は漆黒色不透明の良質黒曜石であり、アバタの多い円礫面を残す。半田産か。全体に風化が進んでいる。平坦打面であり、円礫分界面からの剥離初段階の帽子状剥片である。現状で長さ3.5cm、幅3.1cm、厚さ1.3cmである。

12はC区出土の剥片である。石材は黒色良質黒曜石であり、風化が進んでいる。平坦打面の縦長剥片であり、背面左側はボジ面である。現状で長さ2.7cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmである。

13はB区出土の剥片である。石材は漆黒色不透明の良質黒曜石であり、全体に風化が進んでいる。不定形剥片であり、背面には剥離状跡がある。作業面調整剥片とみられる。現状で長さ2.1cm、幅2.6cm、厚さ1.0cmである。

### 4.まとめ

野芥遺跡第11次調査の旧石器時代資料は本来の包含層を避離した資料であり、丘陵上の浅い谷地形に流れ込んだ状態で出土した。しかし狭い調査範囲の中での分布状態からみると一括性のない資料と断することは出来ない。石器類の内容をみると、新石刃の可能性をもつ1点を除くと、一個縁基部に箇離な調整をもつナイフ形石器(2)、小型の角錐状石器(1,3)がある。角錐状石器は未調整部を残したり、二次調整に面的加工がみられるなど、この様相のなかでも新しい様相が現れている。こうした点から、11次調査出土のナイフ形石器剥離の石器類は後期旧石器時代後半でもより新しい時期に所属するとみられる。資料数が少なく緻密な時期を計りがたい。隣接する4次調査の旧石器時代資料は基部調整のナイフ形石器と剥離であり、剥離や剥片の背面にボジ面が見られる例があることからみて、石核素材の主剥離面を背面に取り込む厚手の縦長剥片削離技術が予測される。こうした技術は九州において大分系製糸工場遺跡や岩戸遺跡6層上に注意されていて、ナイフ形石器技術終末期の様相の一つと考えられている。この4次調査出土の石器類は7次調査SK15出土石器群と共通した内容をもつ。なお7次調査ではや古段階の二側縁調整ナイフ形石器や戸内系ナイフ形石器なども出土している。

このように野芥遺跡では後期旧石器時代後半期に及ぶ石器群が存在し、ナイフ形石器後半期でもより後出する段階の例が多い点が注目される。11次調査の石器類も4次・7次調査例とともに、当該期の研究に貴重な資料となろう。

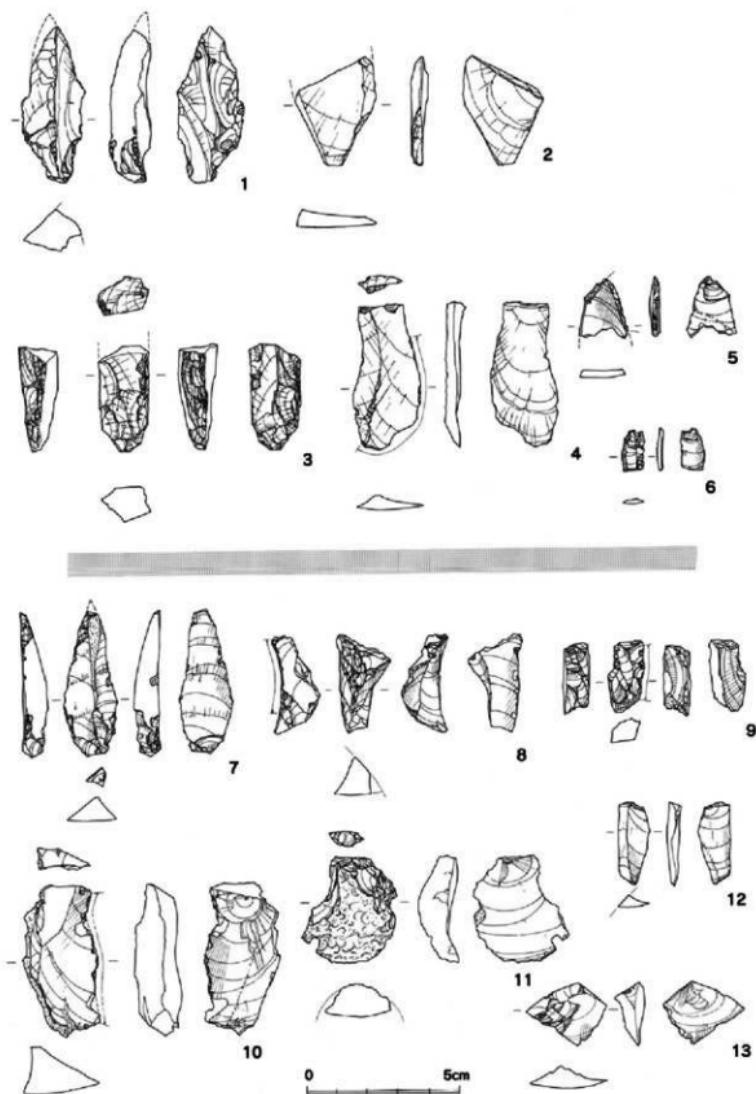


Fig.5 第4次・第11次調査出土旧石器実測図 (2/3)

#### 4. 縄文時代の調査

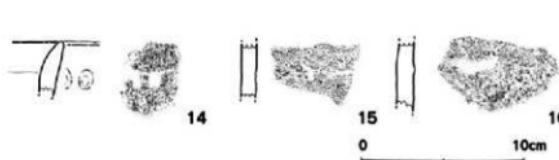
今回の調査において、遺構は、現地表面から-50~100cm、明黄褐色粘質土上にて検出された。しかし、第1区の遺構検出時より、前述の三種尖頭器をはじめとして、黒曜石・サスカイトのチップなど旧石器～縄文時代の遺物が散発的に出土し、2区でも、石器・剥片の出土が少なくなかったため、1区においては調査区全面、2区においては調査区東半に、2m四方のグリッドを設定し掘り下げた。その結果、明黄褐色粘質土はロームの2次堆積土であることがわかり、調査区全体で600点を超える土器・石器を検出できた。

##### ①石器 (Fig.9)

破片を含め17点出土した。17~28は、三角形である。17~20は、黒曜石製で、先端を欠失する。器幅1.7cm・厚さ0.5cmを測る。18は、脚部のみ残る破片で、底面に直線的な抉りを持つ。器幅2.0cmを測る。19は、片脚部先端を欠く個体で、底面はほぼ直線的である。器長2.4cm・厚さ0.4cmを測る。20は、底面に抉りを持つ個体で、先端を欠失する。器幅1.5cm・厚さ0.3cmを測る。21は、サスカイト製で、底面に抉りを持つ。先端を欠失し、器幅1.6cm・厚さ0.5cmを測る。22は、黒曜石製で、完形。器長2.2cm・器幅1.7cm・厚さ0.5cmを測る。23は、サスカイト製で、抉りを持つ。完形。器長1.8cm・器幅2.1cm・厚さ0.4cmを測る。24は、サスカイト製で、ほぼ完形。調整が他の個体に比しやや粗く、未製品の可能性があるが、暫定的に製品とする。器長2.1cm・器幅1.6cmを測る。25は、サスカイト製で、完形の個体。器長2.0cm・器幅2.2cm・厚さ0.4cmを測る。26は、片脚部を欠失する。サスカイト製。未製品の可能性があるが、暫定的に製品とする。器幅1.5cm・厚さ0.4cmを測る。27は、先端を欠失する。サスカイト製。器幅1.4cm・厚さ0.5cmを測る。28は、先端を欠失する。サスカイト製。器幅2.0cm・厚さ0.5cmを測る。19は、先端を欠失する。黒曜石製。器幅1.7cmを測る。29~32は、鐵形鑿である。29は、脚部の破片。サスカイト製。30は、片脚部を欠失する個体。黒曜石製。器長3.0cmを測る。31は、片脚部を欠失する。サスカイト製。推定器長3.9cmで、今回出土した製品では大型の個体である。32は、ほぼ完形の個体。サスカイト製。器長2.2cm・器幅1.8cm・厚さ0.5cmを測る。

##### ②その他の製品・石器未製品・使用剥片 (Fig.10)

33~41は、石器未製品である。33は、上部を欠失する。黒曜石製。幅1.5cm・厚さ0.5cmを測る。34は、黒曜石製。厚さ0.3cmと薄い。35は、サスカイト製。片方の側縁にPebble面を残す。36は、サスカイト製。底辺に粗い調整を施す。厚さ0.4cmを測る。37は、サスカイト製。製品の可能性もあるが、暫定的に未製品とする。脚部端・先端を欠く。厚さ0.6cmを測る。38は、サスカイト製。側縁部に粗な調整が見られる。器幅1.8cm・厚さ0.6cmを測る。39は、黒曜石製。側縁部に調整が見られ、器幅1.7cm・厚さ0.5cmを測る。40は、サスカイト製。削器未製品か。厚さ0.5cmを測る。41は、黒曜石製。左の側縁に刃部調整を施す。42は、使用剥片。残存長3.0cmを測る。43は、削器未製品。サスカイト製。打面と右側縁にPebble面を残す他は、粗い調整が見られる。器長6.9cm・厚さ1.1cmを測る。44は、サスカイト製石匙である。縦長剥片を、長軸を側方に向けてつくる。左右残存幅10.5cm・上下長4.9cm・厚さ0.9cmを測る。



##### ③縄文土器 (Fig.6)

確実な縄文土器は、3点出土した。14は、口縁部の破片で、外面に列点文を施す。他は、肩部の破片である。

Fig. 6 包含層出土縄文土器実測図 (1/3)



Fig. 7 第1区包含層遺物出土状況実測図 (1/100)

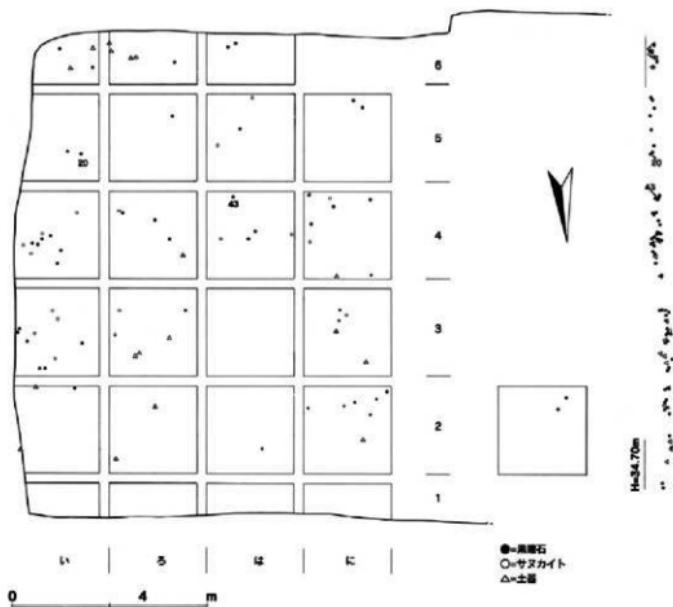


Fig.8 第2区包含層遺物出土状況実測図 (1/100)

## 5 古墳時代以降の調査

掘立柱建物・竪穴住居・溝・土壤・池状造構を検出した。掘立柱建物は、3棟検出した。ピットは多数検出されたが、これ以外検出することはできなかつた。住居址は、7軒検出した。互いに重複して建てられており、古墳時代後期から、古代までの時期差が考えられる。他の造構は、追って述べる。

### ①掘立柱建物 (SB)

#### SB 378建物 (Fig.14・Pl.3-2)

第2区北部にて検出した。中世の溝に切られる。2間×2間の總柱建物で、柱穴は、径0.6~0.7mの不整な円形を呈し、深さ0.5~0.6mを測る。柱痕跡から、柱間は、1.3~1.6mを測る。遺物は、土師器・須恵器が出土したが、細片のため図示し得なかった。

### ②竪穴住居址 (SC)

#### SC 30住居 (Fig.15・Pl.3-3)

第1区南端部にて検出した。床面まで削平され、南西隅部のみ残存し、そこだけに壁溝を検出した。堀方底面まで10~12cmを測る。遺物番号53は、磨石。58は、土師器。口縁部の小片である。要か。

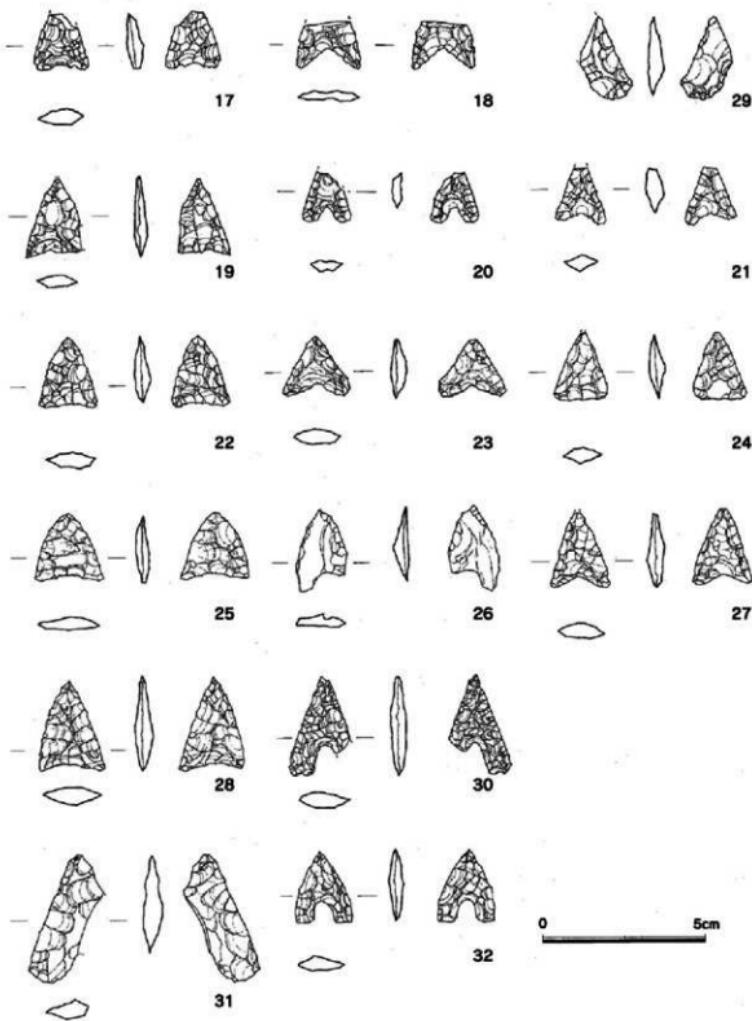


Fig. 9 包含层出土石器实测图① (2/3)

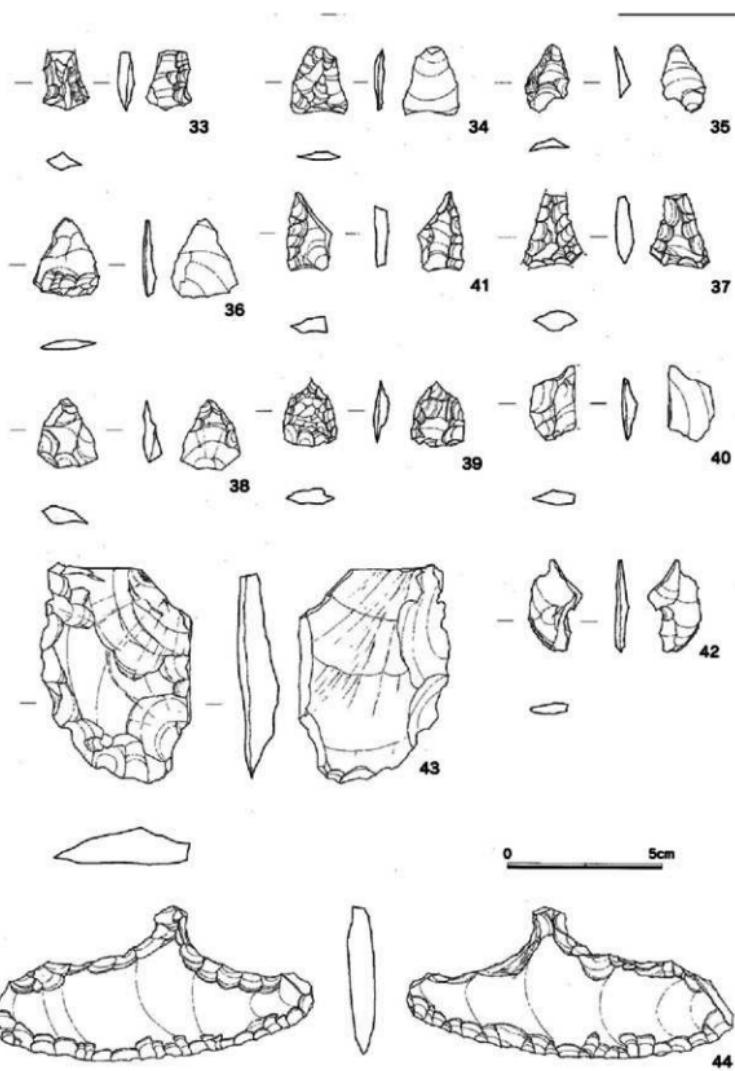


Fig.10 包含層出土石器実測図② (2/3)

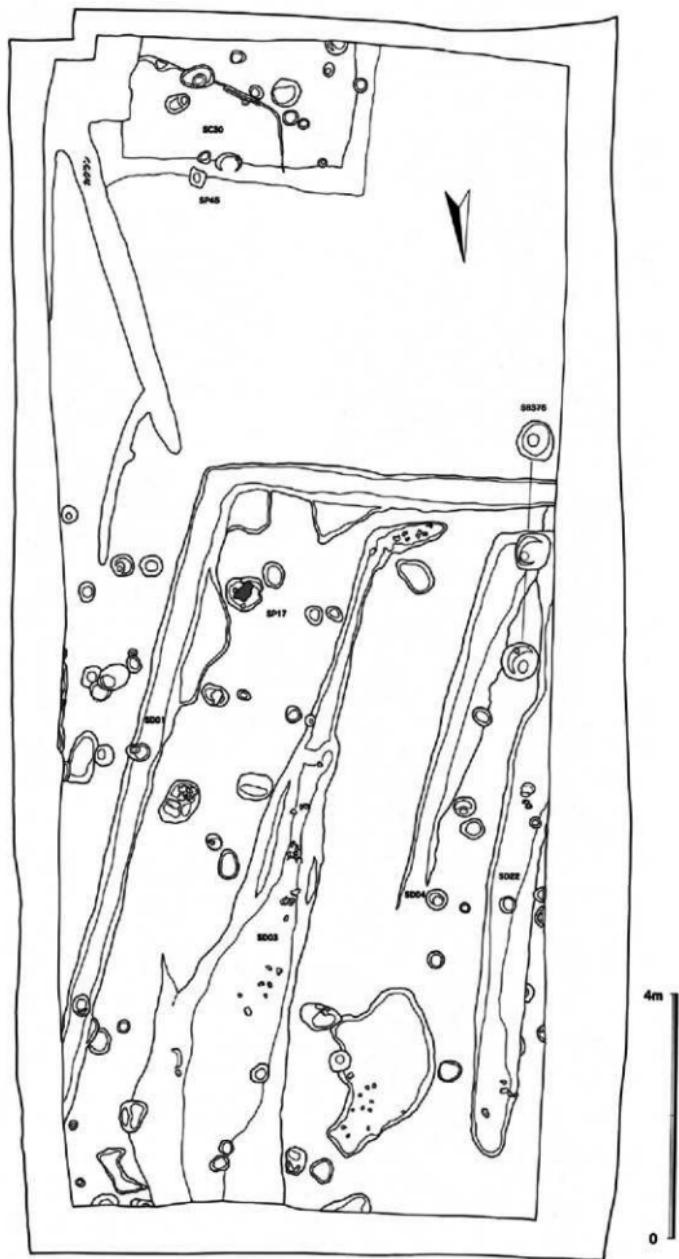


Fig.11 第1区地質構成図 (1/80)

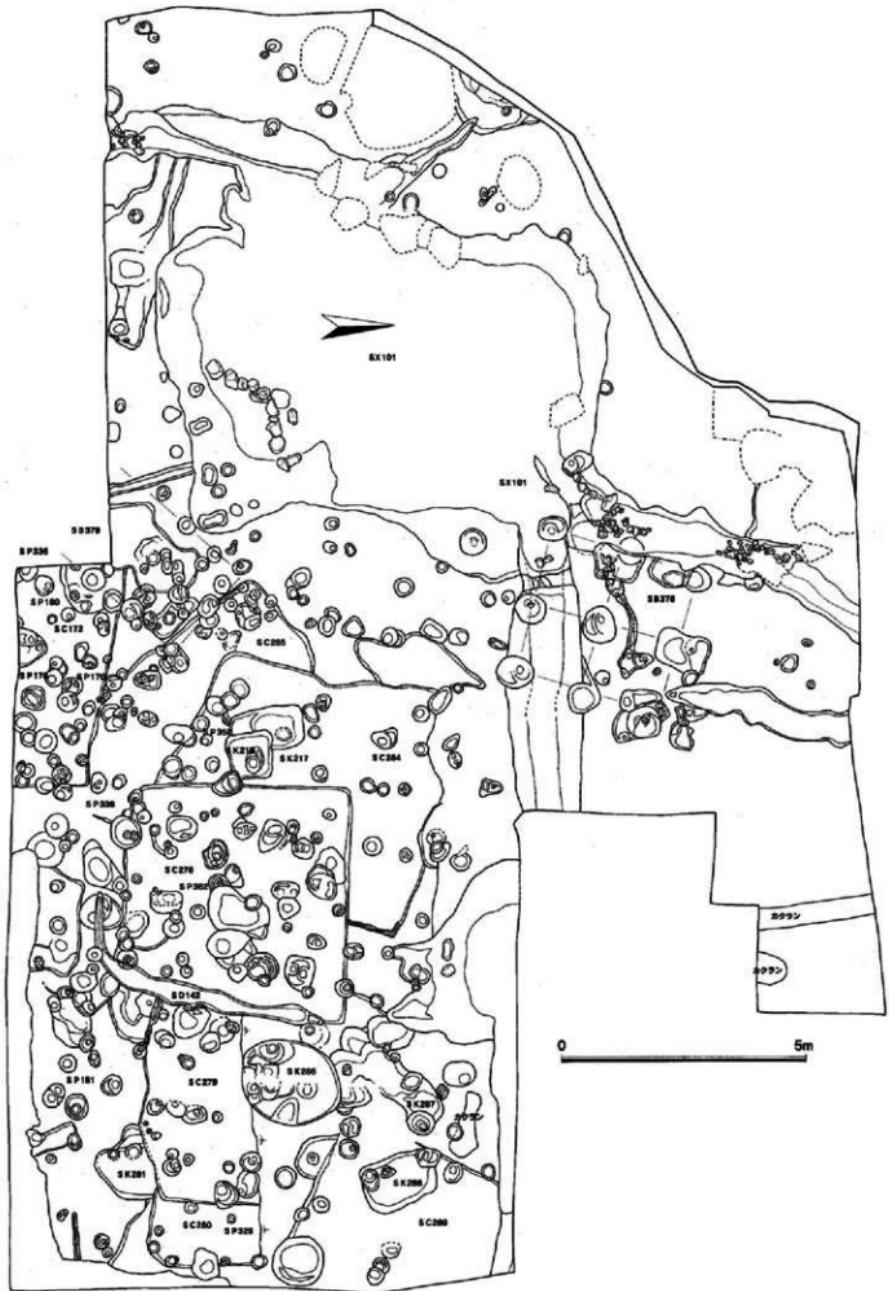


Fig.12 第2区遺構配置図 (1/100)

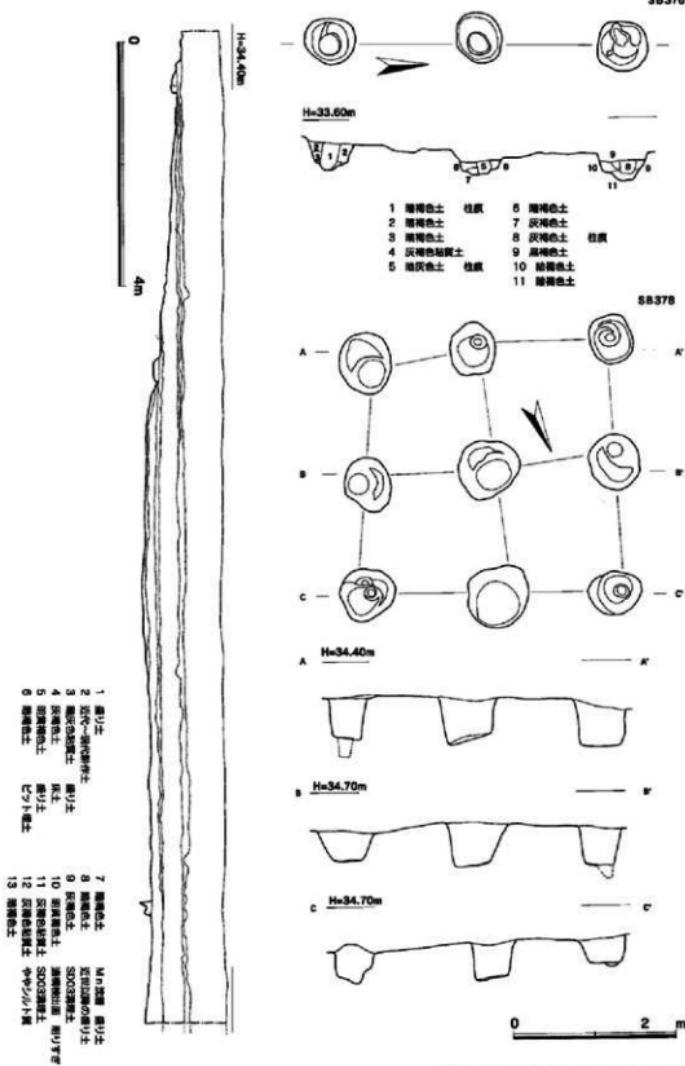


Fig.13 第1区南北土層  
断面実測図 (1/80)

### SC172住居

(Fig.15・Pl.4-1)  
第2区南端にて検出した。大半を病棟に埋される。床面まで削平され、堀方底面まで5cm内外を測る。

### 出土遺物

(Fig.16)  
45・46は、須恵器である。45は、底部の小片である。46は、杯身の底部で、高台はハの字形に開く。小片。

### SC278住居

(Fig.18・Pl.4-2)  
第2区中央にて検出した。東半をSD142に切られる。南北5.1mを測る方形の住居で、床面まで削平される。

### 出土遺物

(Fig.16)  
いずれも須恵器。  
47は、壺蓋の小片である。48は、底部を2/3ほど残す破片。瓶類か。底径は復元で10cmを測る。

Fig.14 SB376・378建物跡実測図 (1/60)

### SC279住居 (Fig.18)

第2区にて検出した。西側をSD142に切られ、東でSC280を切る。

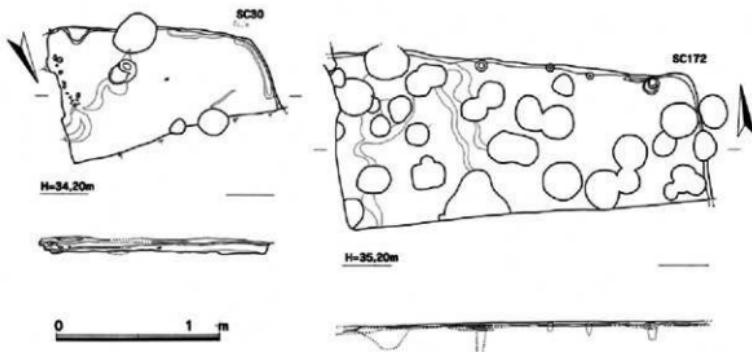


Fig.15 SC 30・172住居跡実測図 (1/30)

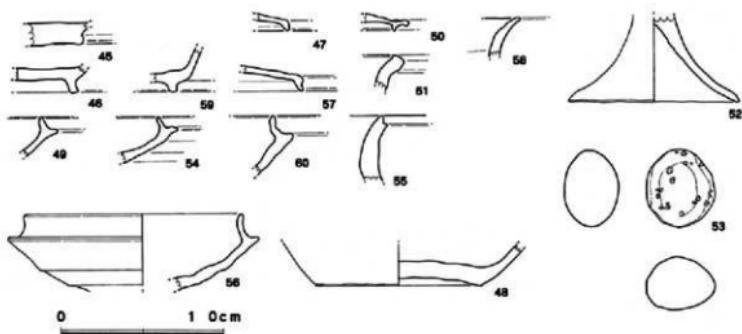


Fig.16 穴穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

方形住居で、北部は消滅している。床面まで削平され、残存部分で、堀方まで10cm程度を測る。

#### 出土遺物 (Fig.16)

49～51は、須恵器。49は、杯身の小片である。50は、かえりがつく环蓋の小片。51は、口縁部の小片。甕か。52は、土師器高环である。脚部が1/4程度残る破片で、底径10.4cmに復元できる。

#### SC280住居 (Fig.18)

第2区東端にて検出した。西をSC279に切られる他、大きく削平され、南東隅部のみ残存する。残存部分も床面まで削平され、堀方まで8cm程度。土師器・須恵器が出土したが、細片のため図示しえなかった。

#### SC284住居 (Fig.17・Pl.4-3)

第2区にて検出した。SC278に切られる。方形住居で、東西長5.1mを測る。床面まで削平が及んでおり、竈などの施設は、検出できなかつた。北東隅部で、幅6cm程度の壁溝を検出した。堀方底面まで、8cm前後を測る。

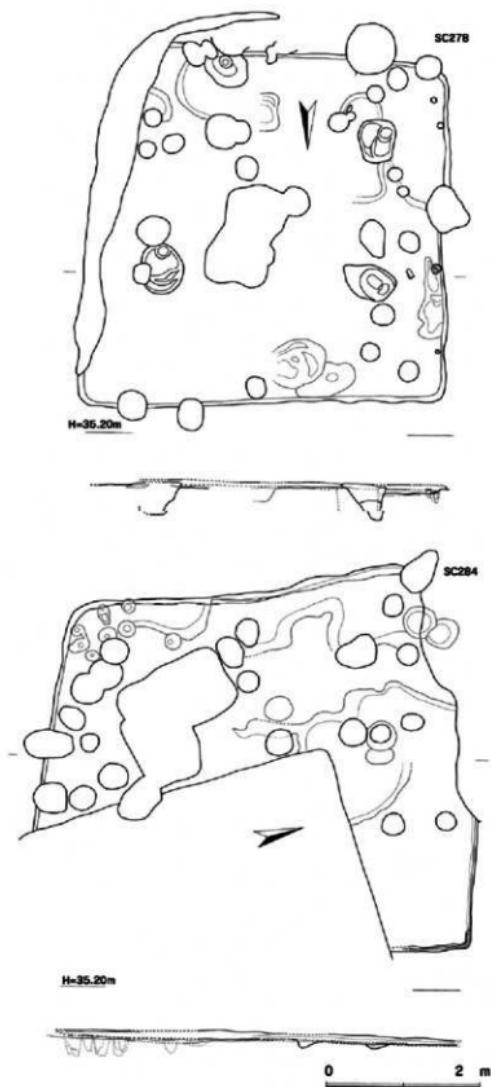


Fig.17 S C278・284住居跡実測図 (1/60)

#### 出土遺物 (Fig.16)

54・55は、須恵器である。54は、杯身の小片である。55は、口縁部の小片。甕か。

#### SC285住居 (Fig.18)

SC172・278・284に切られる。1辺5m以上を測る方形住居と思われるが、大きく削平されたため北西隅部のみ残存し、南部は消滅している。北西壁に壁溝を検出した。堀方底面まで4cm程度の残存である。

#### 出土遺物 (Fig.16)

56・57は、須恵器である。56は、杯身である。1/5個体分の破片で、口径12.2cmに復元できた。体部中程から左回りの回転ヘラ削りを施す。57は、壺蓋の小片である。いずれも胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

#### SC289住居 (Fig.18)

第2区北東隅にて検出した。周壁の立ち上がりのみ検出し得たが、住居でない可能性も否定できない。床面まで削平される。

#### 出土遺物 (Fig.16)

59・60は、須恵器杯身である。59は、ややハの字に開く高台を持つ。60は、低く内傾するかえりを有する。いずれの個体も小片である。

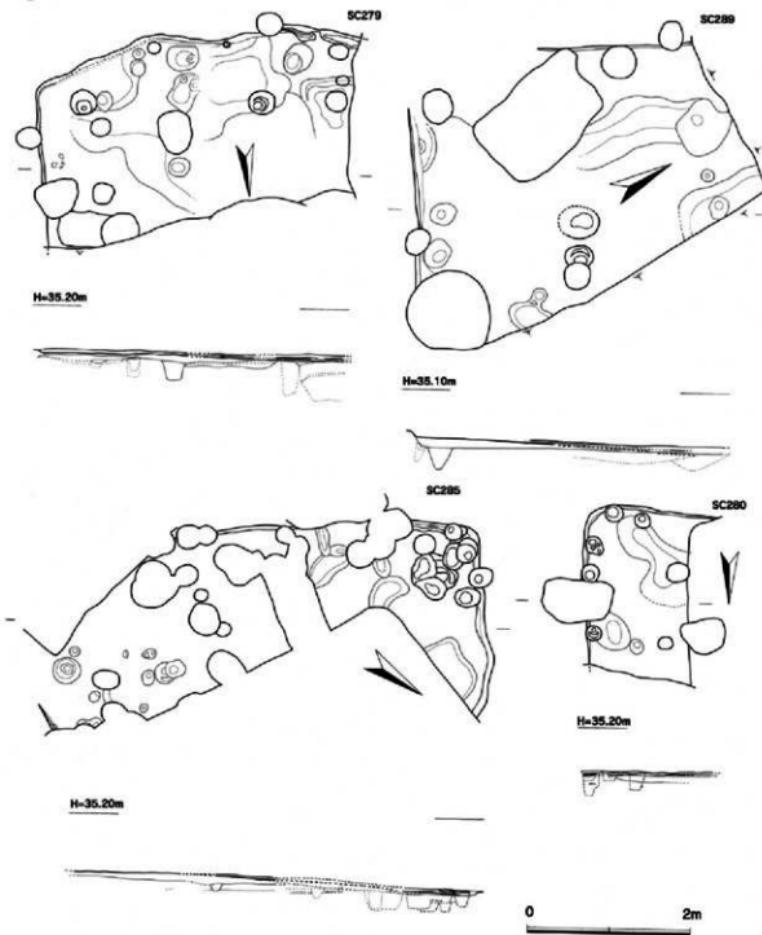


Fig.18 SC279・280・285・289住居跡実測図 (1/60)

③溝 (SD)

SD01溝 (Fig.11)

第1区にて検出した。西方から伸びてきて、調査区内で北に、やや鈍角に屈曲する。幅40~90cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土からは、流水の痕跡は、確認できなかった。

出土遺物 (Fig.19)

61は、龍泉窯系青磁皿である。口縁部の小片で、内外両面に冰裂を有する。

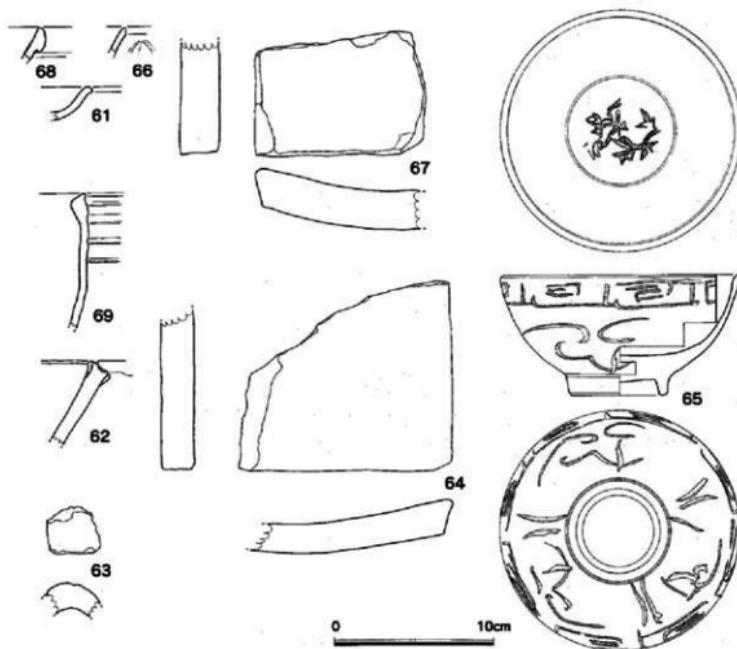


Fig.19 SD溝出土遺物実測図 (1/3)

#### SD03溝 (Fig.11)

第1区にて検出した。SD01溝南北部分とほぼ並行する。北に向かって広く深くなり、断面は、東側が深い逆台形を呈する。幅0.3~2.4m・深さ0.3mを測る。埋土は暗褐色で、流水の痕跡は認められなかった。

#### 出土遺物 (Fig.19)

62は、土解器片口鉢である。口縁部の小片で、注口部が観察される。63は、不明土製品である。輪羽口かとも思われるが、小片のため不明。内面はなめらかに調整される。胎土は砂粒を多く含む。64は、平瓦である。65は、龍泉窯系青磁碗である。破片で出土したが、ほぼ完形に復元できた。口径14.7cm・器高7.5cmを測る。口縁部外面に雷文を、内面見込みにスタンプ文を施す。

#### SD22溝 (Fig.11)

第1区にて検出した。SD01・03溝とはほぼ並行する。区画を、徐々に東に拡張したものか。断面逆台形で、幅0.7~0.8m、深さ約10cmを測る。

#### 出土遺物 (Fig.19)

66は、龍泉窯系青磁である。口縁部の小片で、外面に蓮弁文を施す。67は、平瓦。厚さ2.5cmを測る。

#### SD147溝 (Fig.12)

第2区で検出した。SC278・279を切る。南北方向に握られ、南端は西に緩く屈曲する。

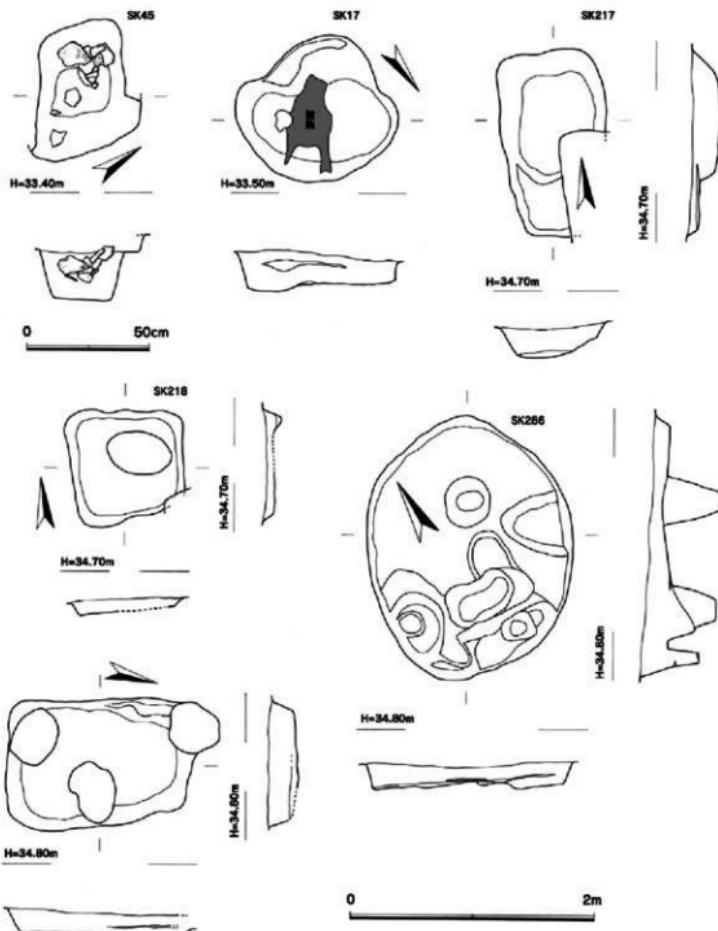


Fig.20 SK土壤実測図 (1/20・1/40)

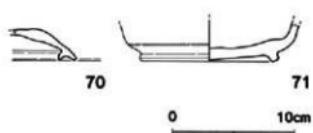


Fig.21 SK土壤出土遺物実測図 (1/3)

#### 出土遺物 (Fig. 19)

68は、白磁碗である。玉縁のつく口縁部の小片。  
69は、無釉陶器鉢である。口縁部の小片。口縁内面を肥厚させ、外面に凹線を施す。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。他に、滑石製石鍋・土師器片が出土したが、細片のため図示し得なかつた。

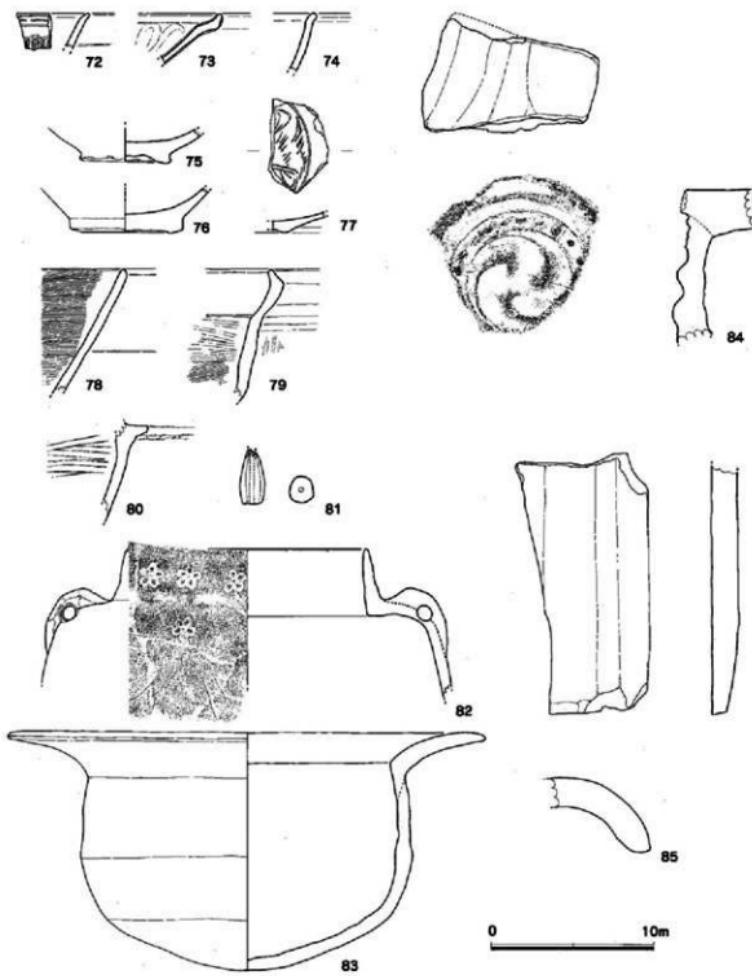


Fig.22 S X101池状遺構出土遺物実測図 (1/3)

④土壤 (SK)

SK17土壤 (Fig.20)

第1区にて検出した。不整な円形の土壤で、深さ12cmを測る。断面隅丸方形で、底面から浮いた状態で被熱面を検出した。炉跡か。土師器細片が出土した。

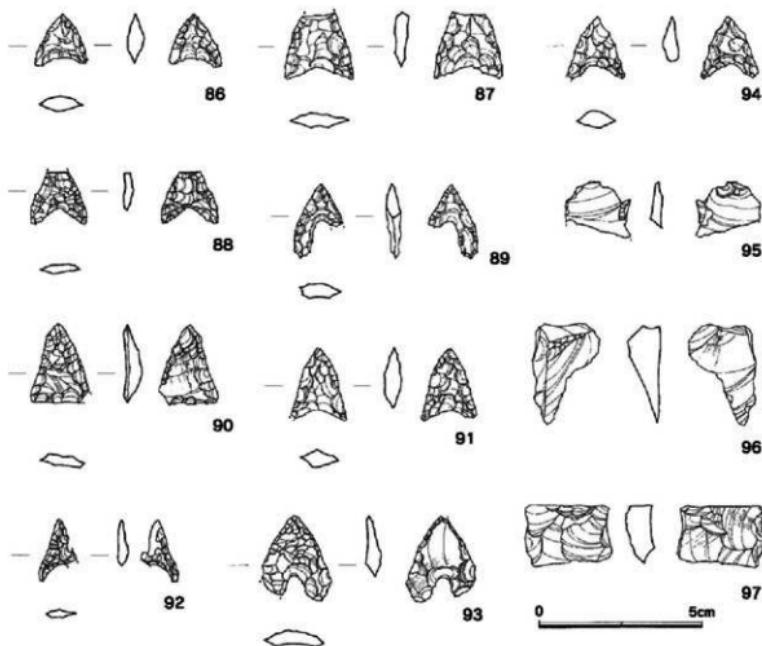


Fig.23 遺構内出土石器実測図① (2/3)

#### SK45土壤 (Fig.20)

第1区にて検出した。不整な長方形を呈する土壤で、上部を大きく削平される。長軸長52cm・深さ18cmを測る。底面から浮いて赤焼土器が出土した。調部の破片で、口縁・底部を欠くため図示し得なかった。

#### SK217土壤 (Fig.20)

第2区にて検出した。SC284住居を切り、SK218土壤に切られる。不整な長方形を呈し、土壤墓の可能性も考えられる。土師器・須恵器が出土したが、細片のため図示し得なかった。

#### SK218土壤 (Fig.20)

第2区にて検出した。SC284住居およびSK217土壤を切る。不整な楕円形を呈し、南北軸長90cm・東西軸長95cm・深さ14cmを測る。土師器・須恵器が出土したが、細片のため図示し得なかった。

#### SK286土壤 (Fig.20)

第2区東部にて検出した。SC279を切る。長径2.1mを測る楕円形の土壤で、大きく削平され、深さ25cmを測る。底面は凹凸が激しい。土師器・須恵器が出土したが、細片のため図示し得なかった。

#### SK288土壤 (Fig.20・Pl.5-2)

第2区北東隅にて検出した。一部ピットに切られるが、長軸を南北方向に持つ不整な長方形の土壤である。長軸長1.5m・短軸長1.03m、大きく削平され、深さは20cmを測る。土壤墓か。

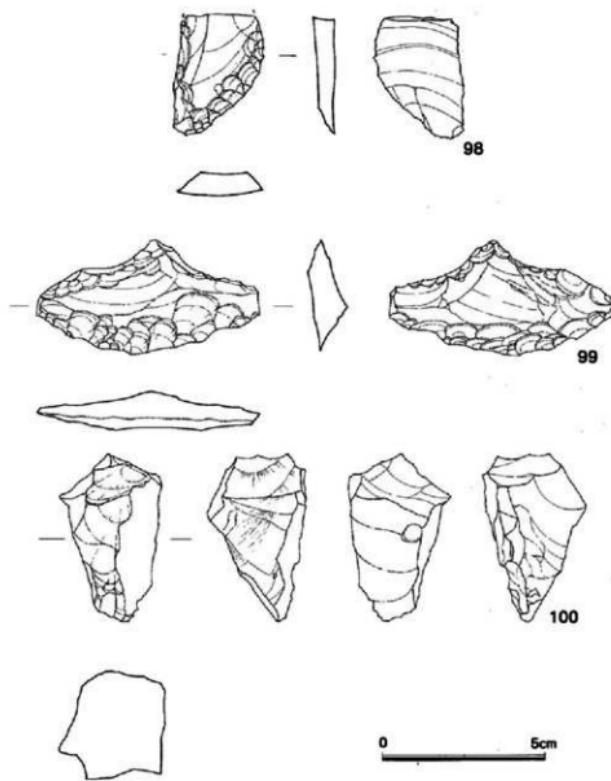


Fig.24 遺構内出土石器実測図② (2/3)

#### 出土遺物 (Fig.21)

70・71は、須恵器である。70は、壺蓋である。口縁部の小片で、内面にかえりがつくタイプ。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。71は、杯身である。底部で1/3程度残存する。高台を有し、復元底径8.8cmを測る。

#### ⑤SX (池状遺構)

##### SX101 (Fig.12)

第2区西端にて検出した。不整な落ち込みで、深さ35cmを測る。人頭大の角礫で列石状の配石がなされる。南から1条、溝が流れ込み、北に1条、東に1条、溝がとりつく。北側溝内には石積みがなされ、水をせき止めた可能性も考えられる。埋土は暗灰色粘質土である。下部に薄い黒色土層がみられ、滞水していた可能性が考えられる。

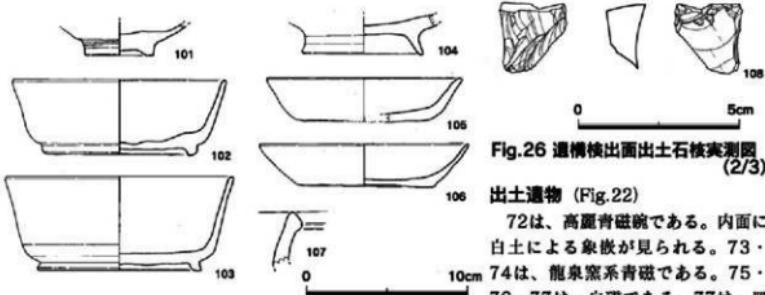


Fig.25 ピット内出土遺物実測図 (1/3)

文を施す。78・79・80は、土師質土器である。78は鉢・79は鍋の、口縁部の小片である。80は釜の小片。81は、土鍾である。土師質を呈する。82・83は、土師質土器である。82は、釜である。口縁部から肩部にかけての破片で、復元口径14.6cmを測る。82は、1/3個体残存する破片で、頭部径18.0cm・器高14.0cmを測る。84は、軒丸瓦である。瓦当部分が1/2程度残存するが、丸瓦部分とは斜めに接合される。注の先端などの部位に使用するものか。85は、丸瓦。

#### ⑥遺構出土の石器類 (Fig.23・24)

86から94は、石鐵である。86・87・91・94は、サスカイト製、88・90・92・93は、黒曜石製である。89は、サスカイト製鉄形鐵である。片脚部を欠損する。器長2.3cmを測る。93は、剥片素材の打面を側縁方向に向けてつくる。95・96は、姫島産黒曜石である。今次調査において出土した石器・剥片のうち2点のみが、姫島産であった。いずれも剥片。95は、先端部を欠く。97は、黒曜石石核である。2面から剥片を採取しており、重量6.3gを測る。98は、使用剥片である。打面側を欠損し、両側縁に2次調整を施す。器長3.6cmを測る。99は、石匙未製品である。器幅6.8cmを測る。100は、サスカイト石核である。4面から剥片の採取を行う。

#### ⑦小結

今回の調査では、旧石器時代から中世に至る遺構・遺物が出土した。包含層からは、旧石器として三段尖頭器・細石器・縄文土器細片、石鐵・削器・石匙が出土した。石鐵は、三角鐵の他鐵形鐵が出土しており、土器の胎土の質感などから、包含層が堆積したのは、縄文早期後半頃と思われる。

古墳時代から古代にかけては、堅穴住居址・掘立柱建物・土壙が検出された。堅穴住居は、SC30をのぞき互いに重複している。床面まで削平されており正確な時期は不明だが、出土遺物から、6世紀末から8世紀代までの時期幅が考えられる。既往の調査と比して、おおよそその時期に大きな集落が形成されると思われる。土壙は、SK288が8世紀代と考えられる他は、遺物が少なく詳しい時期は不明。

中世には、池状遺構・溝・柱穴群が營まれる。池状遺構には、底面に配石がみられ、石積みで水をせき止めるような構造を持つ。軒丸瓦の出土も目立つ。第4次調査では庭園状遺構が検出されており、溜め池と言うよりは、第1区検出の溝とあわせ、文献に見える「野芥大聖寺」と何らかの関わりを持つ池ではないかと考えている。

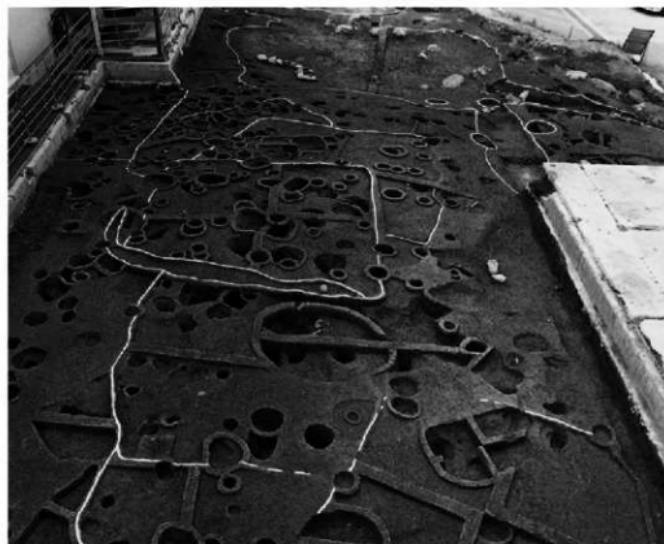
Fig.26 遺構検出面出土石核実測図 (2/3)

#### 出土遺物 (Fig.22)

72は、高麗青磁である。内面に白土による象嵌が見られる。73・74は、龍泉窯系青磁である。75・76・77は、白磁である。77は、皿である。底部の小片で、内面に割花



1.第1区全景  
(南より)



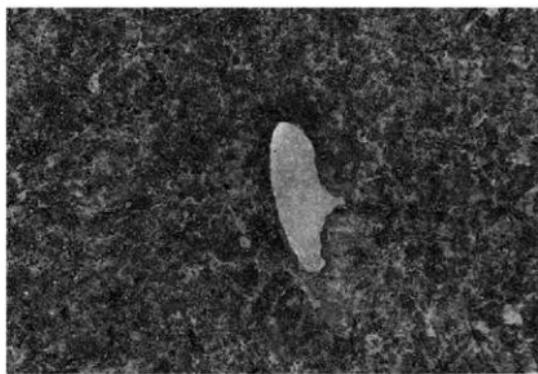
2.第2区全景  
(東より)



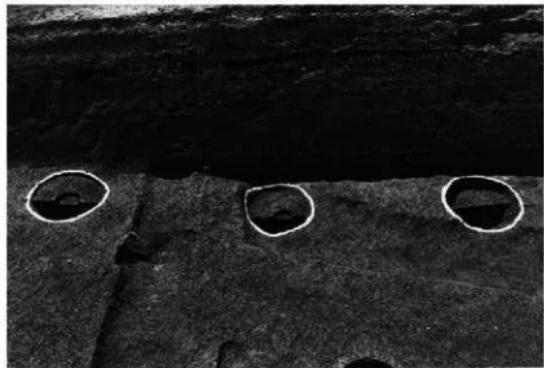
1.第1区 A-2 グリット  
遺物出土状況（東より）



2.第1区 D-4 グリット  
遺物出土状況（東より）



3.第1区 C-4 グリット  
石器出土状況（南より）



1.第1区 SB379建物(東より)



2.第2区 SB378建物(南より)



3.第1区 SC30住居(南より)



1.第2区 SC172住居(西より)



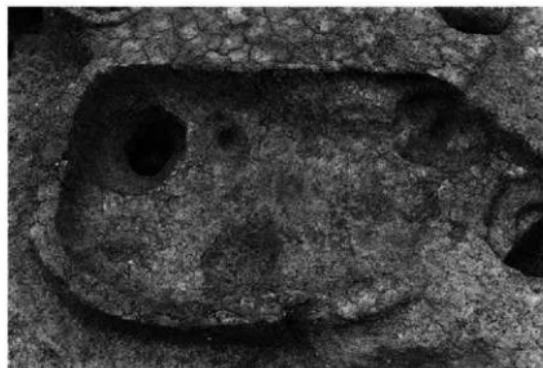
2.第2区 SC278住居(南より)



3.第2区 SC284住居(北より)



1.第2区 SD142溝（北より）



2.第2区 SC288土壙（東より）



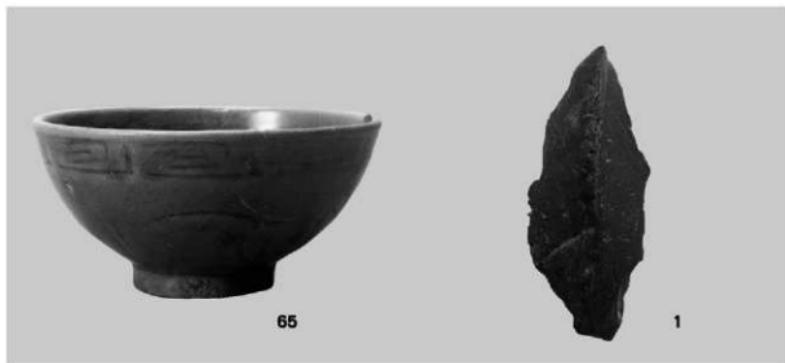
3.第1区 SK45  
遺物出土状況（東より）



1.第2区 SX101北側溝  
石核検出状況（北より）



2.第2区 SX101池状  
遺構配石検出状況（東より）



3.出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	のけ		
書名	野芥		
副書名			
巻次	4		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第804集		
編著者名	阿部 泰之		
編集機関・発行機関	福岡市教育委員会		
発行年月日	平成16年3月31日		
市町村コード・作成法人ID	40137		
所在地	福岡市中央区天神1-8-1		
郵便番号	810-8621		
遺跡名ふりがな	のけいせきぐん		
所収遺跡名	野芥遺跡群		
所在地ふりがな	さわらくのけ5ちょうめ		
遺跡所在地	早良区野芥5丁目		
北緯	33° 32' 10"	東經	130° 21' 32"
調査期間	20020405~200207		
調査面積	526.61m <sup>2</sup>		
調査原因	病棟建設		
種別	散布地/集落		
主な時代	縄文/古墳/中世		
遺跡概要	縄文-土器+石器+削器/古墳-堅穴住居7+掘立柱建物2/中世-溝5+池状遺跡1+掘立柱建物1		

## 野 芥 4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第804集

2004年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社 旭プロセス

福岡市南区清水2丁目13-7